

教育調査の考察と31年度の取組・方向性についての評価委員会からの評価

項目	親/子	設 問	肯定的な割合 ( )は否定的	考 察	平成31年度における具体的な取組・方向性	評価委員会の意見
学校生活全般	親	子どもの学校生活は、全体として満足できるものである。	91.8→92.8 (1.8)	肯定的な回答90%を越え、否定率は低い。組織的にインクルーシブ教育に取り組んでいる結果である。学校の活動の発信が増えて理解を得ているものと考えられる。	・学年、学級経営を充実させ、学力向上と生活指導の充実を実践する。 ・学校の取組を学校便り、ホームページを通して積極的に発信していく。 ・地域運営学校として地域の力を取り入れた活動をさらに推進する。	学校の考察は概ね妥当である。また、学校の取組の成果によって、肯定的な評価が増えたものと考えられる。地域への情報発信を継続するとともに、地域からの意見を収集する仕組みも考えてほしい。
一貫教育／異校種の協働	親	連携する小・中学校による小中一貫教育(小・中学校の教員による協働授業、児童・生徒の交流など地域活動への参加等)が進められている。	55.2→68.5 (6.1)	肯定的な回答が13%以上上がった。これは小中合同あいさつ運動等、交流活動の定着だけでなく、学校だよりや廊下掲示による広報の効果も大きい。しかし依然、肯定的な回答が6割台なので、今後も交流の推進及び積極的な発信をしていく必要がある。	・今年度新規に開催できた中瀬中吹奏楽部の演奏会や中瀬中図書委員会による読み聞かせ等の取組をさらに充実させるとともに、広報にも積極的に取り組んでいく。	昨年度に続いてよく取り組んだことが、肯定的な評価につながったと考えられる。今年度の取組を益々充実させるとともに、新たな取組を模索してもらいたい。
学校評価	親	学校は、自校の教育活動に関する評価結果とそれに基づく改善策等の情報を提供している。	68.4→80.6 (1.7)	肯定的な回答が12%以上上がった。これは学校だより等による各学力・体力調査結果の結果の公表や年度末に行う学校評価説明会の開催の定着による結果である。また、各行事の際に行うアンケートの結果を受けて、各種取組を改善している結果である。	・今後も各種調査の結果や保護者・地域の皆様からの意見を参考に教育活動の改善に取り組んでいく。	学校の取組は概ね良かったと感じている。肯定的な評価は増加しており、今年度の取組を継続して向上を目指してもらいたい。地域への情報発信や評価説明会の参加率が課題である。
学級経営	親	学校では、子どもが安心・安全な学校生活を送ることができる学級づくりを行っている。	87.0→86.8 (2.5)	落ち着いた学校生活を送っている児童が多いが、児童の評価が下がったことは留意すべきことである。児童の意見や思いを受け止めた学級経営と生活指導の徹底をさらに進めるよう、教職員の意識を改善する必要がある。また、学級差や学年差をさらになくし、児童の3.6%の否定した数値をなくすことができるように努めていく。	・八成ハンドブックに基づいたインクルーシブ教育を進め、全学級での共通実践を徹底する。 ・学級間の指導の差をなくし、共通理解・共通行動がとれる学年体制の構築を図る。 ・報告・連絡・相談を密に行い、児童の生活や心の状況の共有を図る。 ・学級経営に関する研修会に参加させ、OJTを活用して共有を図る。	落ち着いた学校生活を送っている点は高く評価できる。保護者の評価と児童の評価の乖離がある点は、調査の対象となる児童の半数が入れ替わることを考慮すると判断が難しいところである。児童が意見を良く発信し、相互に分かり合える環境と雰囲気作りを期待したい。
	子	先生は、クラスのみんなが分かり合い、協力し合えるようにしてくれている。	88.8→84.0 (3.6)			
個に応じた指導	子	授業では、自分の得意なところを伸ばしたり、苦手なところを少なくしたりできるように、個別に教えてくれている。	60.4→49.5 (19.7)	授業スタイルの転換により、小グループや全体での対話で「課題が解決する」「よりよい方法に気付く」「できるようになる」ことが多くなったため、授業中に個別指導をする必要が減少したことが考えられる。	・授業展開や座席やコーナー配置等をさらに工夫し、児童が個別に相談したいと考えたときに応じることができるようにしていく。 ・毎時間の一人一人の学びを丁寧に見取り、適切な声掛けをする。	児童は、自分を受け入れてもらっている実感が弱いということである。担任は、児童の気持ちに寄り添って授業を中心とした様々な場面できめ細かく関わり、短時間で個々に対応する努力をしてほしい。
学習の成果	親	子どもは、学校の授業を通して、分かることやできることが増えている。	90.7→92.0 (1.2)	保護者からは概ね肯定的な評価である。学習を振り返る際に、「どのようなことを考えたのか」「どのように自分が変容したのか」等、自己の学びや成長を意識できるようにしていく必要がある。また、児童の肯定率がやや減少した原因の一つに、中学受験用の塾に通っている児童が先行学習をしているため学習内容を「もう知っている」と捉えていることが考えられる。	・校内研究を中心として新学習指導要領の理解を深め、教員一人一人がさらなる授業改善や指導力向上に努める。 ・児童が「何を学んだか」「どのように学んだか」「学んだことがどう役立っているか」を意識することができるような声掛けや指導をしていく。 ・児童の変容を見取り、声掛けやノートコメント等で児童一人一人に成長を伝える機会を増やしていく。	学力に関する調査結果では向上が見られており、保護者の評価結果も良い結果となっている。児童の評価と差が出ていること、肯定的な回答が少ないことは改善を要する課題である。テスト結果や学習の最終的な評価はもちろんだが、担任による日常的なきめ細かい声掛けが、児童の肯定感につながると考えられる。楽しい授業、魅力ある授業に取り組み、担任の指導力向上に努めてもらいたい。
	子	学校の授業によって、分かることやできることが増えている。	87.0→85.0 (5.9)			
学習評価	親	学校は、子どもの学習状況を適正に評価している。	79.7→83.2 (2.6)	通知表やテストの点数だけでなく、ノートやワークシートの確認など、家庭への理解を深めることができた。児童に対しては、学習状況や取り組みの様子を把握して、褒めたり認めたりする声掛けをきめ細かく行うことが必要である。	・評価は指導と表裏一体である。学習指導力の向上を図り、評価の精度を高めて子どもの成長に結び付ける。学年会や専科会、OJT等を活用して、教材研究や指導法の工夫改善を進め、学年の共通実践に努める。 ・授業の中で、児童の学習状況に応じたきめ細かい声掛けを心がける。	
	子	先生は、授業で自分ができたことを誉めてくれたり、間違えたところを教えてくれたりしている。	85.4→76.5 (7.7)			
ICT機器の活用	親	学校は、ICT機器(電子黒板やデジタル教科書等)を活用した授業を行っている。	75.5→83.8 (2.8)	この2年間で60%後半から今年度80%前半まで保護者の肯定率も上昇してきている。各学年・学級による学校公開等での活用の場が増えていることが肯定率の上昇につながったと考えられる。児童の肯定率が初めて減少に転じた。通常授業での使用がほぼ常態化し、また、スクリーンの破損、プロジェクター電球の白色化等の劣化により設置時より視覚的に見にくい状況が考えられる。	・児童によるノートパソコンおよびタブレットPCの活用が図られるように授業を組み立てる。 ・プログラミング教育に引き続き取り組む。 ・デジタルビデオカメラ(ぼうけんくん)の体育授業でのより一層の活用及び他教科での活用を推進していく。	授業でICT機器を活用する様子は見られている。プログラミング教育やロジカルシンキングの授業を実施していることも評価できる。授業以外での活用を模索するなど、今後も推進するよう努力してもらいたい。タブレットの導入が待ち遠しいところである。
	子	先生は、授業において電子黒板やデジタル教科書を活用している。	96.0→94.5 (2.4)			
系統的・連続的指導	子	先生は、今の授業で学習していることが、前の授業や今後の授業とどのようにつながっているか、教えてくれている。	79.2→79.9 (4.7)	杉並区9年カリキュラムに基づいた系統的指導を実行しており、日常的な指導の中で系統を示す声かけがやや少ないことが要因と考えられる。教員の発問や説明にさらに加えられるよう意識させていく。	・各教科で既習事項や学習内容の系統を確認し、それを活用した主体的な学習を推進する。 ・東京ベーシックドリルを活用する。	一つの単元の中で、前後の授業のつながりを示すことはできている。既習事項の確認や学習内容がその後どの学年で生かされるのかなど、学年の越えた系統的な配列を捉えて授業を行うことが必要なのではないか。
道徳教育	親	子どもは、学校での生活を通して、他者と共によりよく生きるための力が育まれている。	83.5→90.1 (2.0)	保護者は、道徳が教科化されて日頃から道徳の授業を行っている実感が増えていると考えられる。児童の肯定的な割合が大きく上がったのは、お話の中の登場人物の道徳心と自分自身の道徳心とが結び付いていないのではないかと考察する。自分ならどうすべきなのか、見つめなおしていく必要がある。	・「道徳科 指導と評価ガイドブック」を活用し、学校全体で道徳科の指導について改めて確認したり、評価の捉え方やその方法について研修を行ったりする。 ・指導する道徳的価値観の理解を深め、効果的な授業展開を模索する。	道徳教育の推進は、いじめの防止に直結するものだと考える。しっかり考え、道徳的価値観を身に付けられるよう、道徳教育を推進してもらいたい。教員は、指導力向上に努め、授業だけでなく様々な機会を使って指導する意識をもってほしい。児童の個々の価値観を尊重した道徳教育も考えたい。
	子	道徳の時間では、友達や家族、地域の人たち共によりよく生きることの大切さについて、みんなで話し合っている。	77.2→72.6 (9.2)			
体育・健康教育	親	子どもは、学校での生活を通して、体力や食、生活習慣をはじめ健康な生活を送る力が育まれている。	89.2→92.5 (0.8)	1校1取組ということで、八成小学校としての運動習慣の取組を進めることができた。児童がさらに前向きに取り組めるよう、声掛けを続けていく。健康な生活を送るための意味を、教師から児童にさらに伝えていく機会をつくる必要がある。	・学校としては、長縄週間や持久走週間を通して体力の向上を目指している。教師が休み時間に外で遊ぶことの大切さや、朝の時間・授業などで健康な生活を送る大切さを伝えていく必要があると考える。 ・長縄グランプリなどの学校外の行事にも積極的に取り組み、その意味を見いだせるよう、声掛けをしていく。	長縄週間、持久走週間、コーディネーショントレーニングなどの取組が成果を上げ、体力の向上は図られた。健康に関する児童の評価が低いことが問題である。養護教諭による健康教育や栄養士を活用した食育にさらに力を注いでもらいたい。
	子	先生は、健康な生活を送るために必要なことを教えてくれている。	84.9→77.4 (7.5)			
特別支援教育	親	学校は、子どもたちの発達に関する課題など、障害理解を深める情報を提供している。	60.3→69.3 (3.6)	担任が保護者と面談をして理解と対応について話す機会を設けている。年度初めの保護者会での説明や「ほほ笑み便り」を通して情報を提供してきたが、まだ十分とは言えず、模索する必要がある。	「ほほ笑み便り」を引き続き発行していく。また、学校公開の時には特別支援教室の施設を公開し、情報を提供することで認知度を高めて障害理解やインクルーシブ教育の推進につなげていく。	学校としての特別支援教育は順調に進められており、「ほほ笑み便り」による保護者等への啓発もできている。今後も継続して取り組んでほしい。
地域との協働	親	学校は、家庭や地域と連携・協力して教育活動を行っている。	80.0→72.8 (3.6)	現状としては、学校支援本部やPTAの方に協力してもらって行っていることは多くある。活動ごとに子どもにも話をしたり、お礼をしたりしてきているが、あまり意識されていないために肯定率が下がったと考えられる。日頃から、支援してもらっていることを、保護者にも子どもにも伝えていくことが必要である。	・学校だよりにおいて児童の活動の様子を伝える時に、特に地域や学校支援本部の方にご協力をいただいている活動については、そのことも併せて紹介していく。 ・各学年での取り組みの時には、講師の方々だけでなく、その活動をコーディネートしてくださった方にもお礼を言う。	学校支援本部はとてよく協力し、授業支援をしている。学校と支援本部との密接なつながりができ、学校職員に近い存在として児童に意識されているため、児童の評価に結びつきにくいのではないかと。教員が学校支援本部や地域との連携・協働についてしっかり意識し、児童にその都度説明することが必要だと考えられる。
	子	先生は、地域の人たちと協力しながら、授業や学校行事をよりよくしてくれている。	71.0→61.3 (10.4)			
いじめ防止	親	学校は、困ったり、悩んだりしたとき、相談にのったり話を聞いてくれたりする。	61.6→82.0 (3.0)	保護者の肯定率は、約20%上がった。これは、大きな問題が発生していないということや校内のいじめ防止対策委員会として担任だけでなく、スクールカウンセラーや管理職を窓口で置くことで、校内組織体制が築かれているためと考えられる。しかし、児童においては、相談を恥ずかしがったり、言い出せなかったりする状況が考えられる。担任だけでなく、学校はいつでも、誰でも相談にのってくれることを児童に周知する必要がある。	・学校いじめ防止基本方針に基づき、学校いじめ防止対策委員会で組織的に対応していく。 ・道徳や学級活動において児童がいじめを深く考え、いじめは絶対に許されないことを自覚するために定期的にいじめに関する授業を行う。 ・毎週金曜日に生活指導夕会を実施し、学年ごとの児童の情報交換を行い、いじめの早期発見につなげ、教職員同士が情報を共有していく。	保護者と児童の評価結果に大きな差があり、児童の肯定的な回答が少ないことは課題である。担任は、いじめは決して許さないという意思をはっきり示し、個々の児童の言葉を真摯に受け止め、組織的に対応することを心がけてもらいたい。
	子	学校は、困ったり、悩んだりしたとき、相談にのったり話を聞いたりしてくれる。	65.8→60.3 (11.6)			